

意見陳述

①

私は、不同意わいせつ致傷の疑いで逮捕され、約4か月間勾留されました。裁判員裁判の結果、一審では無罪の判決を受けました。私が無罪判決を受けるまでの過程で、今の日本の刑事司法がいかに人権を無視したシステムであるかを、身をもって体験しました。この体験を通して、私が伝えたかったことはただ一つ。人質司法の現状を知ってほしいということです。無実の人間が司法の手続きにいかにも無力で、どれほど心身に負担を強いられ、生活を壊されてしまうのか。この現実を多くの人に知ってもらい、少しでも早く改善されることを切に願っています。そこで、私は自身の体験を通じて、現在の日本の刑事司法の問題を提起させていただきます。

②

人質司法の問題は、皆他人事だと思っています。私自身も、逮捕されるまではそう思っていました。日本の刑事司法は、様々な課題はあるにしろきちんと運用されていると思っていましたし、警察・検察もちゃんとした組織だと思っていました。しかし、実際はそうではありませんでした。警察も検察も、自分たちのストーリーどおりに事件を進めることしか考えていなくて、真実などどうでもいいのだろうなと感じました。彼らは被疑者・被告人の人権を無視していると思います。

③

その証拠に、東京地方検察庁へ取調べに連れていかれたときには、木製の堅い長椅子に長時間座っていなければならなかったり、食事の際にすら手錠を外してくれません。机すらないので、食事を床や椅子において這うようにして食べなければなりません。

トイレも同じ部屋にあって、ちょっとした衝立のようなもので仕切られているだけなので、臭気も充満して非常に不衛生でした。

周りとしゃべったり、音をたてたりするのも絶対禁止で、話し声や手錠の音がしたりすると、「おい！勝手に喋るんじゃねえよ！」や「てめえうるせえんだよ！！」などとヤクザとしか思えないようなものすごい剣幕で、職員が怒鳴るのです。

このように、身体拘束されているときには、特に捜査機関からは全く人間扱いされず、心を折るような体制が当たり前に行われていたのです。

裁判所も、身体拘束について本当にきちんと考えてくれているのか、正直かなり疑問です。

起訴前に検察官の勾留請求が却下されたのに、その決定がひっくり返って勾留されることになったのはなぜなのか、第一次保釈請求が認められず、第二次保釈請求は認められましたが、そこの違いは何だったのか、そもそもどうして第一次保釈請求の段階で保釈が許可されなかったのか、全くわかりません。

裁判所がどのように判断してそういう結果になったのかも、全くわかりません。

私が勾留され、保釈されなかった理由も、裁判所の決定書などを見せられても全くわかりませんでした。

ろくな説明もなく、先に述べたような人権を無視した環境に強制的におかれ、保釈も認められず、保釈が認められない理由も教えられないというのは、まったく異常だと思います。

確かに、中には、被告人の身体拘束をしないといけない事件もあるのかもしれませんが。

しかし、私も「疑わしきは罰せず」という言葉を聞いた事があります。

未決の人に対して、人権を無視するような今の刑事司法のあり方は、間違っていると思います。

まだ裁判で有罪と確定したわけでない被疑者・被告人に対して、このような仕打ちは、判決前に刑罰を与えるのと何ら変わりありません。

これは憲法で定められている基本的人権の侵害にほかならず、「疑わしきは罰する」というようにしか思えません。

現在の日本の刑事司法がどれほど人権を無視しているのか、そして冤罪を生み出すリスクがあるかを、私は身をもって知ることになりました。

私自身、勾留中に、やってもいないのに、罪を認めてしまった方が楽なのではないかと何度も思いました。

罪を認めるからと警察を呼んでもらおうともしました。

冷静な判断など、できなくなるのです。

「推定無罪」の原則がどれほど重要かを、私は今、強く感じています。

無実の人々が司法によって傷つけられ、時には人生を狂わせられる。

その現実を目の当たりにし、私は何よりもその改善を求める気持ちが強くなりました。

この問題は他人事ではありません。

人質司法の存在が、冤罪を生む原因になっているのです。

私はこの経験を通じて、一刻も早くこの制度が改善され、無実の人々が不当に苦しむことがなくなることを強く願っています。

司法が人間の尊厳を守るべきだということが、何よりも大切だと感じています。

人質司法の改善のために、私たち一人ひとりが声を上げていかなければなりません。

この現実を変えるために、少しでも多くの人が共感し、力を合わせる必要があります。

冤罪の事件も含めて、人質司法に人生を大きく狂わされてしまった人はたくさんいると思います。

1日も早く、この人質司法が是正され、私たちのような人質司法の被害者がいなくなることを、切に願います。

以 上